

【書評】

小沼聖治 著

『ソーシャルアクション・モデルの形成過程
ー精神保健福祉士の実践を可視化するー』

(法律文化社, 2024 年, A5 判, 208 頁, 4,000 円+税)

長 崎 和 則

(特定非営利活動法人 ひろしまメンタルヘルス
アドボケイトセンター 檸檬のこころ)

1. 本書の概要と特徴

本書は、著者の精神保健福祉士としての実践を通して著者の博士論文『ソーシャルアクションにおけるソーシャルアクションのモデル形成ー精神保健福祉士の実践に着目してー』を元に、最新の政策動向や実践が加筆されたものである。そのため、2つの特徴がある。1つめは、テーマとしてのソーシャルアクションの重要性である。そして2つめは、研究目的に対する研究方法である。

ソーシャルワークにおいては、ソーシャルワークに関連する実践モデルやその内容を明らかにする研究が必要となる。そして、①実際に行われている実践を対象にして、実践がどのように行われているのか（実践対象、実践内容、実践方法などの実態）を探索的に明らかにすること、②実践を整理し実践モデルを作ること、③作られた実践モデルを実際に行うことで実践モデルを修正・改良してモデルの精緻化をすること、が必要である。この3つとの関係でいうと、本書は①および②に該当する。

本書の精神保健福祉におけるソーシャルアクションというテーマは、これまで多くの研究がされてきたわけではないという特徴がある。その背景

には、精神保健福祉領域でのソーシャルワークは他の社会福祉分野と異なり、精神障害の置かれている特殊な状況がある。それは、精神障害は、他の障害と異なり障害が「固定」することが難しく、疾病と障害の区別ができていないという特徴があることである。精神障害は長く医療の対象として捉えられてきたために、精神障害者を対象とした福祉サービスの運用やソーシャルワーク実践は進んでいないところがある。本書でもこのことについて触れており、精神保健福祉においてはソーシャルアクションが重要であるにもかかわらず、必要なソーシャルワーク実践が行えていないと述べている。特に、日本においては、アメリカで行われているプラグマティズムに基づくソーシャルワークと異なり、法的な枠組みの中での社会福祉サービスではソーシャルワークが実現しにくいと思われる。ちなみに、1995年の精神保健福祉法（精神保健及び精神障害者福祉に関する法律）によって始めて法律に規定されている。つまり、精神障害者のニーズ充足のために必要な社会福祉サービスが他の障害と比べて充実していないという状況がある。

このような状況では、必要なにもかかわらず支援やサービスが不足するため、ソーシャルワークのなかでもソーシャルアクションはとても重要

となる。しかしながら、日本におけるソーシャルワークに関する研究やソーシャルワーカー養成教育は、ミクロ実践を中心としたものになってきた傾向がある。そして、ソーシャルアクションに関する研究は未だ少ないため、本書でソーシャルアクションを取りあげる意義はソーシャルワーク研究の中で大きいといえよう。

2. 章構成と内容

本書の構成は、次のようになっている。

- 序 章 ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションの意義
- 第1章 ソーシャルワークにおけるソーシャルアクション理論の変遷
- 第2章 精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識と実践に関する実態調査
- 第3章 精神保健福祉士のソーシャルアクションを対象とした M-GTA の質的分析
- 第4章 精神保健福祉士によるソーシャルアクションのモデル形成
- 第5章 ソーシャルアクション「活性化モデル」の意義と将来への提言

以下、概要とその意味を考えて行きたい。なお、文章後の（ ）の中の数字はページ数である。

1) 序書 ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションの意義

序章では、全体の元になる問題意識とリサーチクエスチョン、研究目的について述べられている。

まずは、ソーシャルワークの定義をもとに、社会変革を目指すためにソーシャルアクションは重要であり中核的な役割であることを指摘している(1, 2)。また、ソーシャルアクションに対する認識は不十分であるとも述べている(2)。さらに、精神保健福祉士を対象にしたソーシャルアクションの研究は少ないことを指摘し、本研究の重要性

を主張している(4)。

研究の目的は、精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識と実践に関する現状と課題を明らかにすることとしている(5)。そして課題は、①精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識を明らかにすること、②精神保健福祉士によるソーシャルアクションの実践プロセスを明らかにすること、③ソーシャルアクションのコンピテンシーを明らかにすることであるとしている(6)。

そして、この目的を達成するために、量的研究と質的研究を採用した混合研究法を採用している。それらは、①精神保健福祉士を対象とした量的研究によるソーシャルアクションの実態を明らかにすること、②エキスパート精神保健福祉士を対象とした質的研究によってソーシャルアクション実践モデル形成過程を明らかにすること、の2つであるとしている(6-7)。

2) 第1章 ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションの意義

北米のソーシャルアクションに関する文献研究について述べている(12)。ソーシャルアクションの定義について、1929年頃の指摘として、「ソーシャルワーカーがクライアントの組織化や社会活動に参加することは、制度・政策を運用する立場と矛盾」(12)やソーシャルワークのグローバル定義にある「社会変革」について述べている(14)。また、1960年代からの公民権運動との関係で「社会正義を目指すため、市民運動の重要性」や「政治に圧力をかけることの必要性」について紹介している(14)。そして、ソーシャルアクションとアドボカシー、コミュニティ・オーガニゼーション、ソーシャルアクションのモデルやソーシャルワーカー養成教育との関係で整理をしている。

1990年代になると、変革だけでなく、セルフヘルプ運動やセルフマネジメント、エンパワメントが不可欠であるといわれるように変化していることを示している。またここでも、ソーシャルワーカーはサービスを提供する側であり、社会変

革を目的とした活動の主体は当事者がふさわしいという矛盾を述べている (15)。

ソーシャルアクションはアドボカシーと密接な関係にあり、1935年当時は、ソーシャルアクションは「同時のアドボカシーとほぼ同義として整理」されていることを述べている。その後は、「アドボカシーはソーシャルアクションの一形態」や「一機能」であるとされるようになったことを記している (16, 17)。

さらに、ソーシャルアクションとコミュニティ・オーガニゼーションとの関係についても言及しており、「コミュニティ・オーガニゼーションは、社会の権力構造に変化をもたらすソーシャルアクションを含む」(17)、あるいは「ソーシャルアクションがコミュニティ・オーガニゼーションの一機能として理解されるようになった」としている (17)。そして、本書の主テーマでもあるソーシャルアクションのモデルを複数紹介している (18-21)。

日本におけるソーシャルアクションの先行研究については、アメリカ合衆国におけるソーシャルワークの六分法が紹介された際には含まれていなかったことを示している。日本におけるソーシャルアクションは、組織的活動としての位置づけから始まっているとしている。(22)。これは、政府の対応に対する批判から始まっており、政治的な責任を問う活動である。2000年代に入ると、社会運動の意義が再検討され、行政や地域社会に対する啓発活動によって理解と協力を得て行くプロセスとして「運動」を定義するようになり、協力しつつ変革を目指すように変化したことを示している。

コミュニティ・オーガニゼーションとしての位置づけについては、従来は「地域社会の合意形成より抗争対立が重視され、団体交渉や裁判闘争、直接的な圧力行動が特徴的であった」としている。その後、対立から「地域社会や集団間の関係、あるいは社会的意思決定の権力構造に変化をもたらすこと」を目的に変化したことを述べている。

この他、援助技術としてのソーシャルアクション

は、社会福祉運動として位置づけられていたことを示し、従来の「闘争・葛藤モデル」から行政や地域住民とのパートナーシップを重視した「住民・行政パートナーシップモデル」や「市民・行政協働モデル」、多様な主体と協働関係を構築する「協働モデル」などの複数のモデルが紹介されている。ソーシャルワーク養成教育における位置づけとしては、ソーシャルアクションがソーシャルワーク教育に含まれていなかった時代があったことを示している。2021年の社会福祉士養成カリキュラム改正によってソーシャルアクションを重視するように変化し現在に至っていることについて述べている。これらのことから、ソーシャルワークにおいてはソーシャルワーカーの役割が協働モデルに変化しており、ソーシャルアクションを教育プログラムのなかで必要になったことを示しており、現在の課題としてソーシャルアクションのモデル化が必要としている (33)。

先行研究レビューを通して、アメリカ合衆国においてソーシャルアクションがどのように発展してきたのかが整理されていることはとても重要である。また、アドボカシーやエンパワメント等との関係が整理されたことは有意義である。しかし、北米と書かれているが、アメリカ合衆国のみの文献が紹介されている。北米という場合、アメリカ合衆国以外にカナダやメキシコも含むため表記はふさわしくないといえよう。

3) 第2章 精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識と実践に関する実態調査

第2章は、精神保健福祉士が行うソーシャルアクションの実態に関する調査である。既に日本精神保健福祉士協会が実施した調査結果を紹介し、「少なくともここ約10年は精神保健福祉士は他の業務と比較して『ソーシャルアクションを実施していない、実践はできていない』と感じている傾向がある」ことが述べられている (37)。また、先行研究レビューを踏まえ、「精神保健福祉士によるソーシャルアクションに対する意識と実践の程度は、プロセスの各段階で、どのような差があるのか」を検討するというふうに変化して

いることを述べている (38)。

先行研究を通じて明らかにされたソーシャルアクションの各プロセスから質問項目を作成し、さらにインタビュー調査で生成された項目を用いて調査が行われている。いくつかを紹介すると、ソーシャルアクションは、年齢的には40歳未満よりも40歳以上のほうが、意識が高いという結果を示している (51)。また、一般職より管理職の精神保健福祉士のほうが、意識が高い (52)。そして、スーパービジョンを受けた経験がない精神保健福祉士よりも受けた経験がある精神保健福祉士のほうが、意識が高い結果となっている。また、実施程度も高いと述べている (54)。

この項目で気になるのは、他のソーシャルワークの役割との比較はどうなっているのかということである。ソーシャルアクションだけではなく、他のソーシャルワークの役割に関しても、同様のことが言えるのではないだろうか。ソーシャルアクションの特徴としてのみえることではないとすれば、なぜソーシャルアクションは実施されないのかということについては明らかにされていない。

量的調査の結果として、「精神保健福祉士はソーシャルアクションに対する意識はある程度あるが、具体的な実施にはほぼ至っていない」(58)と述べている。また、ソーシャルアクション実践を支える要素として、「ニーズ・資源調整」、「職能団体とのつながり」、「ネットワークづくり」「個別支援のジレンマ」を抽出している。ただし、これらのみで実践モデルとして必要とはいえないとしている。

気になる点として、ソーシャルアクション実践が実施されていないことは明らかになっているが、どのような要因が影響しているのか等については明らかにされていないことある。著者は、「ソーシャルアクションに対する高い意識はみられるが、具体的な実践には十分至っていない現状が明らかになった」と述べている。そして、「その実践をさらに促進するためには、精神保健福祉士と精神保健福祉士を取り巻く社会環境の相互作用を可視化し、より詳細な実践モデルを形成する

必要がある」と述べ、そのために質的研究によってプロセスを明らかにする必要があると述べている (62)。ソーシャルアクションの必要性は意識しているものの、実践できていないのはどうしてなのかについて明らかにしないと、著者のリサーチクエストに答えられていないのではないだろうか。

4) 第3章 精神保健福祉士のソーシャルアクションを対象とした M-GTA の質的分析

本章では、「精神保健福祉士によるソーシャルアクションモデルを形成することを目的とした」と述べられている (64)。しかし、M-GTA を使う分析で何を明らかにするのかについては明確には示されていない。書かれているのは、「精神保健福祉士のソーシャルアクション実践がどのようなプロセスを経て、精神保健福祉制度やサービスの改善・開発へとつながっていくのかに着目」することである (64)。

分析テーマは、データ収集時の暫定的なものとして、「精神保健福祉士が地域課題の改善や新しい社会資源の開発に向けて働きかけていくプロセス」としている (69)。この分析テーマは、暫定的なソーシャルアクションの定義を、「精神保健福祉士が、精神障害者の生活ニーズの充足および精神障害者の偏見・差別の解消に向けた地域住民の価値観の変容を志向し、精神障害当事者や家族ならびに関係機関、地方公共団体等と連携・協働し、精神保健福祉制度・サービスの開発・改善を目指した実践」としているからであろう。このプロセスは定義に書かれている実践であり、ソーシャルアクションなのだろうかという点が気になる。ここで言う実践とは、ソーシャルワークであり、その中で用いられている機能としてソーシャルアクションが含まれているのではないだろうか。

次に、調査対象である。精神保健福祉士協会としての10年以上の実務経験とソーシャルアクションの実践経験を有する者をエキスパート精神保健福祉士とし、インタビュー調査の対象としている。また、分析焦点者として「精神保健福祉士」

を挙げている(67)。著者が明らかにしたいことは、「精神保健福祉士が地域課題の改善や新しい社会資源の開発に向けて働きかけていくプロセス」である。注目する点は、「働きかけていく」プロセスということであり、ソーシャルアクションが実現するプロセスではないことである。精神保健福祉士が「働きかけていく」際に行っていることはソーシャルアクションと言えるのかということが疑問に残る。研究の手順として、ソーシャルアクションの定義を上記のようにするという事なので、それに沿った分析がされたという理解をするので大きな問題はないと解釈すべきであろう。

分析テーマについては、M-GTA ではよく起こることであるが、分析の経過に伴い分析テーマの絞り込みがされている。絞り込まれた分析テーマは、「精神保健福祉士が地域における新しい社会資源の開発に向けて働きかけていくプロセス」と変化している(アンダーラインは筆者が追加)(70)。

5) 第4章 精神保健福祉士によるソーシャルアクションのモデル形成

本章では、M-GTA の分析を終えての結果が結果図とストーリーラインで示されている。

生成されたカテゴリーは、【持続可能なシステムの構築】、【アクションの原動力の醸成】、【当事者との協働関係の構築】、【自律した実践を支える職場環境づくり】、【関係機関と共同戦線をはる】、【実践への交渉】の6つである。

結果を見ると、ソーシャルアクションにおいてどのようなことをしているということが明らかになっている。このなかで、興味深いのは、【関係機関と共同戦線をはる】(99)である。特に、このカテゴリーにある〈情報のつなぎ役〉や〈旗を振る〉は非常に興味深い。

分析結果であるが、研究目的との関係で、いくつか気になるところがある。それは、次のようなものである。

①これらのプロセスは、「やろうとした」ととどまっているのではないかということである。

ソーシャルアクションのプロセスであるが、ソーシャルアクションが実現したといえるためには、「やろうとした」ではなく、そのプロセスがあることでソーシャルアクションが「できた」あるいは「実現した」ということが必要なのではないだろうか。この区別ができなかったことは残念である。

先行研究との比較検討は重要である。いくつかについて述べる。新たな知見として、ソーシャルアクションの原動力となるものとして、【アクションの原動力の醸成】と【自律した実践を支える職場環境づくり】の2つが重要であることを示している(120)。特に、個別支援から地域課題を意識し、具体的な行動へと至るプロセスは重要である。また、〈専門職としての稔侍〉〈当事者の切なる声への支援〉〈理不尽への危機感〉が連動することで問題意識や動機づけが高まっていたことは具体的で分かりやすい(121-122)。そして、「ソーシャルアクションを精神保健福祉士が単独で行うことは困難」と述べ、「関係機関との合意形成や交渉が暗礁に乗り上げ、あきらめの気持ちが生じる時に必要となる、志を同じくする〈同志との切磋琢磨〉や〈先輩から学ぶ〉(122)は興味深い。

【自律した実践を支える職場環境づくり】では、これまであまり触れられてこなかった「〈経営的な視点をもつ〉ことや、〈定期的な実績報告〉や〈実践の見える化〉を継続することで、管理職等の主要な分野の携わる人々の理解を得ていた」ことも重要である(123)。また、これまで以上に、「ソーシャルアクションの原動力として利用者のニーズが出发点となる」ことを明らかにしている。ソーシャルアクションのスキルとして、「実践に影響を与える所属機関の機能を活かし、どのようにマネジメントしていくのか」を明らかにした意義は大きいといえよう(123)。さらに、組織内でソーシャルアクションの意義を共有することだけでなく、「当該の社会活動が経営的にも組織に貢献し得ること」を示したことも重要である(124)。

量的研究と質的研究の関連については、「ソー

シャルアクションの学びだけでは具体的な実践につながる十分条件とはいえない」としている。これは、単にソーシャルアクションについて学ぶだけでなく、当事者のニーズがあるにもかかわらず支援が行われない現状への危機感をエネルギーとしてどのようにソーシャルアクションを行うのが重要であるということである。そして、その際に、所属組織の特性を理解した上で、所属機関の役割を行うためにこそソーシャルアクションが必要であることを分析結果から明らかにしている。

3. おわりに

これまで十分に研究されてこなかった精神保健福祉士が行うソーシャルアクションについて、丁寧な先行研究レビューを踏まえた研究は意義深い。また、日本精神保健福祉士協会や著者が行っ

た精神保健福祉士のソーシャルアクションに関する実態調査を踏まえている点も重要である。特に貴重なのは、M-GTAによりソーシャルアクションのプロセスを明らかにしたことである。いくつかの新規性もみられ、この研究によりソーシャルアクションで重要となることが明示されたことは非常に重要である。

本研究によって、ソーシャルアクションが行われる際にどのようなことがあるのかは明らかになっている。しかし、ソーシャルアクションが効果的に行われるためにはどのようなことが影響しているのかについてやソーシャルアクション以外のソーシャルワークの役割との関係は明らかになっていないのではないだろうか。この研究を踏まえ、更なるソーシャルアクションの研究が進み、精神保健福祉士が今まで以上にソーシャルアクションを実践できるようになることを期待したい。